

て、お父さんの昔の話を聞く——というのが、いい。買って来たばかりのマンガを開くときのように、胸がときどきして、わくわくする。(足と速め、理由)

③『みちしお荘』は、船だまりのすぐ前であった。古びた漁船が二十隻近く並んだ中に祖父の船もある。ひとときわ古い。少年が中学校に上がったなら船を新調しようかと話していて、それっきりになってしまった。

シライさんは宿帳に名前を書いたあと、部屋には入らずに、一階の食堂に少年を誘った。

「ジュース飲むか？」

「……はい。」

「じゃあ、ジュースと、ビール。」

注文を取った『みちしお荘』のおかみさんは、少年を見て「おじいちゃんも急なことじゃったなあ。」と寂しそうな顔になり、頭をなでてくれた。

ビールとジュース、それに「サービスです。」とゆでたイカの小鉢がテーブルに並んだ。この地方でベイカと呼ぶ、春が旬の小さなイカだ。酔味噌で食べると、すっぱさの奥でじんわりと甘みがにじむ。

「人が亡くなったときには乾杯っていわないんだ。献杯っていうんだ。」

ケンパイ。また知らない言葉が出てきた。ふだんなら、家に帰って母にきけば、すぐに漢字を教えてくれる。でも、今夜はたぶんそんなことを話しかける余裕はないだろう。

ビールとジュースのコップを軽くぶつけてケンパイすると、シライさんはビールを一口飲んで、ふうふう、と声を出して息をついた。

「写真、見せてやるよ。」

床に置いたバッグのファスナーを開け、中からふ厚く膨らんだ封筒を取り出した。

「これ、全部写真なんですか？」

「ああ。全部、おじいさんとお父さんの写真だよ。」

ほら、これ、とシライさんは封筒から出した写真を何枚かまとめて少年に渡した。祖父と父がいた。船に乗っていた。二人とも今よりずっと若い。父はまだ二十歳そこそこで、祖父も還暦前だった。

はげていない頃の写真を見せたらおじいちゃんに恥ずかしがるだろうか、とクスツと笑いかけて、ああそうか、と頬をすぼめた。もうおじいちゃんと話すことはできないんだな。おとといから何度も思ってきたことなのに、今初めて、それが悲しさと結びついた。ここで初めて、悲しいと思えた。

船だまり  
船が風や波を避けるために停泊する場所。  
隻

献 甘 酢 鉢

15 罎 じんわり

筒 封